身体表現の指導の現状に関する研究
―保育者が指導する上で重要視している内容について―

田　辺　昌　吾・江　原　千　恵・内　藤　真　希
古　市　久　子・遠　藤　　晶・松　山　由美子

保育現場における身体表現の指導の現状を明らかにするために、保育者が身体表現に関連する保育実践において重要視している内容について検討を行った。207名の保育者から回答を得た質問紙調査の結果、身体表現に関連する保育実践において重要視している内容は、『個の発達と友達関係の深まり』『決まった型のある表現』『生活を通しての表現』の３つの因子で構成されていることが明らかになった。この３つの因子ごとに、子どもの年齢によって重要視している程度に差があるかどうかを検討したところ、５歳児ほど指導の重要度が増すことが示された。一方で、子どもの年齢によって重要視している内容が異なることも示された。以上より、身体表現の指導において、子どもの年齢に合わせた具体的な教材や指導方法の必要性が示唆された。

キーワード：身体表現、指導内容、領域「表現」

Ⅰ．問題と目的

「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」。幼稚園教育要領、保育所保育指針の領域「表現」における目的である。子どもは毎日の生活の中で、身近な周囲の環境とかかわりながら、心を動かす経験を重ねている。その子どもが、自分の心の動きを声や体の動き、素材となるものなどを仲立ちにして表現し、その過程を通して、感じること、考えること、イメージを広げることを重ね、感性と表現する力を養い、創造性を豊かにしていくことが目指されている[1)2)]。学校教育法の幼稚園の教育目標に関する条項において、領域「表現」に該当する部分には「音楽、身体による表現、造形等に親しむことを通じて、豊かな感性と表現力の芽生えを養うこと」[3)]と記され、領域「表現」の目的が、主に３つの柱（音楽、身体による表現、造形）によって達成されることが示されている。

このうち「身体表現」について、古市（2007）[4)]は、定型的な枠ではとらえにくい分野であり、いくつかの困難さをもつ領域であると指摘している。それは、①幼児の一回性からくるデータ収集の困難さ、②個の発達と集団の影響が同時進行で起きること、③表現された動きの評価について基準が曖昧であることの３つを主な理由とし、研究の蓄積も十分でないとしている。

以上のことを踏まえ、本研究では保育現場における身体表現の指導の現状に着目する。具体的には、保育者が子どもの身体表現をどのように理解し、指導にあたっているのかを、身体表

現に関連する保育実践において重要視している内容という視点から捉える。そして、表現に関する曖昧な基準を可能な限り客観化するために、量的データによる研究を試みる。

Ⅱ．方法

A．データ収集の手続きと調査対象者

調査は、愛知県・大阪府・福岡県の、公立幼稚園・保育園（所）及び私立幼稚園・保育園（所）各50園（合計600園）を無作為に抽出し、勤務する保育者を対象に質問紙法により実施した。2010年10月～12月に、各園（所）に郵送にて質問紙の配布・回収を行った。倫理的配慮として、研究目的、得られたデータは研究目的以外に使用しないこと、無記名であり回答者は特定されないこと、調査票の提出をもって上記内容に同意したものとすることを調査依頼書に明記した。

B．調査内容

（1）属性項目

勤務園の種別・公立私立の別・地域、回答者の性別・年齢・勤続年数について回答を求めた。

（2）保育者が身体表現に関連する保育実践において重要視している内容

保育現場における身体表現の指導の現状を明らかにするために、保育者が指導する上で重要視している内容について質問項目を作成した。作成にあたっては、私立幼稚園１園、私立保育園１園の保育者22名を対象に、「子どもが楽しんで表現していると感じられる場面のエピソード」を自由記述形式にて調査し、回答結果から身体表現に関連する保育実践を抽出した。その内容をもとに、幼稚園教育要領・保育所保育指針の記載内容を踏まえて、最終的に35項目の指導内容を確定した。「次の各項目について、あなたが身体表現に関連する保育実践において、子どもが表現することに関して重要視している程度をお答えください」という教示文に基づき、回答内容が何歳児の保育実践に関するものかを問うた上で、「とても重要視している」から「あまり重要視していない」までの６件法（６点～１点）で回答を求めた。

Ⅲ．結果と考察

以下の分析にはIBM SPSS Statistics 19を使用した。

調査票の回収は207票（回収率34.8％）であった。

A．回答者の属性

回答者の勤務園について、種別は、幼稚園107名（51.7％）、保育園（所）98名（47.3％）、その他（認定こども園）２名（1.0％）、公私の別は、国公立園91名（44.0％）、私立園116名（56.0％）、地域は、愛知県95名（45.9％）、大阪府58名（28.0％）、福岡県54名（26.1％）であった。また回答者について、性別は、女性196名（94.7％）、男性10名（4.8％）、無回答１名（0.5％）、年齢は、20歳代49名（23.7％）、30歳代44名（21.3％）、40歳代50名（24.2％）、50歳以上63名（30.4％）、無回答１名（0.5％）、勤続年数は、５年未満32名（15.5％）、５年以上10年未満26名（12.6％）、

10年以上20年未満53名（25.6％）、20年以上30年未満48名（23.2％）、30年以上45名（21.7％）、無回答３名（1.4％）、平均勤続年数は18.3年であった（表１参照）。

表１　回答者の属性（N＝207）

		人	%
勤務先			
・種別	幼稚園	107	51.7
	保育園（所）	98	47.3
	その他（認定こども園）	2	1.0
・公私の別	国公立園	91	44.0
	私立園	116	56.0
・地域	愛知県	95	45.9
	大阪府	58	28.0
	福岡県	54	26.1
回答者			
・性別	女性	196	94.7
	男性	10	4.8
	無回答	1	0.5
・年齢	20 歳代	49	23.7
	30 歳代	44	21.3
	40 歳代	50	24.2
	50 歳以上	63	30.4
	無回答	1	0.5
・勤続年数	5 年未満	32	15.5
	5 年以上 10 年未満	26	12.6
	10 年以上 20 年未満	53	25.6
	20 年以上 30 年未満	48	23.2
	30 年以上	45	21.7
	無回答	3	1.4
平均勤続年数	18.3 年		

B．保育者が身体表現に関連する保育実践において重要視している内容

（１）各項目の平均値

35項目について、平均値および標準偏差を示したものが表２である（６点満点）。上位の項目ほど保育者が重要視している内容である。

「楽しんで表現する」「音や感触を楽しむ」といった子どもが楽しむことや、「伸び伸びと自由に表現する」「自分なりの表現ができる」といった子ども主体の表現を特に重要視していることが窺える。表現することを楽しむことや自分なりに表現することは、教育要領・保育指針の領域「表現」の「ねらい」として掲げられていることである。当然ではあるが、保育者が教

表２　身体表現に関連する保育実践において重要視している内容
平均値、標準偏差（平均値降順）

項目	平均値	標準偏差
楽しんで表現する	5.58	.721
伸び伸びと自由に表現する	5.39	.830
音や感触を楽しむ	5.14	.971
上手にできたことを子どもが喜ぶ	5.05	1.072
自分なりの表現ができる	4.95	1.107
生活の様々な出来事から刺激を受け、表現する	4.74	1.081
自分の身体を自由に動かせるようになる	4.71	1.031
興味をもって友達の表現を見る	4.70	1.150
表現することで友達との関わりが増える	4.68	1.090
リズムに合わせて自分なりの表現ができる	4.63	1.082
友達から友達へ表現が広がる	4.55	1.128
身近にあるものを何かに見立てて遊ぶ	4.53	1.118
少しずつ表現が上手になる	4.51	1.085
感じたことを身体で表現できる	4.49	1.114
恥ずかしがらずに表現する	4.46	1.085
保育者のしぐさや動きを真似る	4.45	1.202
保育者に表現を見せに来る	4.44	1.082
表現することに熱中する	4.39	1.158
以前よりも大きな表現ができるようになる	4.32	1.056
友達同士が同じ表現をすることを楽しむ	4.32	1.092
音や音楽を聞くとすぐに身体が反応する	4.29	1.063
友達の真似をしていた動きが自分でできるようになる	4.26	1.082
曲に合わせて踊れる	4.25	1.080
自分で創造的な表現を考える	4.24	1.257
絵本や歌などに出てくるものを表現する	4.23	1.050
経験したことを身体で再現する	4.21	1.079
友達のしぐさや動きを真似る	4.17	1.066
友達同士で表現を見せ合う	4.16	1.163
お話の場面を演じる	4.13	1.227
集団でいるがそれぞれ違った動きをする	4.10	1.135
言葉の代わりに身体で表現し伝える	4.02	1.084
表現のとき、手拍子や掛け声を入れることができる	3.86	1.190
徐々に自分の世界に入っていく	3.80	1.141
集団でそろって動く	3.74	1.295
自分でリズムを作り出す	3.65	1.219

育要領・保育指針の基本的な考え方に基づいて身体表現の指導にあたっているということが示された。

その他の項目を見ても、最も平均値の低い項目（「自分でリズムを作り出す」）でも平均値3.65であり、35項目中平均値が４点以上が31項目と多数を占め、本研究で作成した調査内容は、全体的に身体表現に関連する保育実践において重要視されている内容であった。

（２）潜在因子の探索

保育者が身体表現に関連する保育実践において重要視している内容には、どのような因子が潜在しているのかを明らかにするために、35項目について探索的因子分析（重み付けなし最小２乗法、プロマックス回転）を行った。因子数は固有値１以上の基準を設け、因子負荷が0.4に満たない項目や複数の因子にまたがって高い負荷を示した項目を削除し、解釈の可能性も考慮し、最終的に20項目で３因子を抽出した（表３参照）。

第１因子は、「自分で創造的な表現を考える」「自分なりの表現ができる」「友達から友達へ表現が広がる」「表現することで友達との関わりが増える」などの項目で負荷量が高く、子どもが個として表現に取り組み発達していくとともに、友達との関係が深まっていくという内容から、『個の発達と友達関係の深まり』因子と命名した。第２因子は、「曲に合わせて踊れる」「集団でそろって動く」「お話の場面を演じる」などの項目で負荷量が高く、曲やお話に合わせた表現や集団で同じような表現をするといった、ある程度型の決まった表現をするという内容から、『決まった型のある表現』因子と命名した。第３因子は、「言葉の代わりに身体で表現し伝える」「経験したことを身体で再現する」「生活の様々な出来事から刺激を受け、表現する」などの項目で負荷量が高く、園生活の様々な場面で見られる表現という内容から、『生活を通しての表現』因子と命名した。

各因子に高い負荷を示した項目群の信頼性係数（Cronbachのα係数）は、第１因子より順に.912／.824／.845、20項目全体では.939であり、十分な信頼性が認められた。そして、各因子に高い負荷を示した項目群の合計得点を算出し、それを項目数で除したものを各下位尺度得点とした。下位尺度得点の平均値は、第１因子より順に4.33／4.36／4.36、20項目全体では4.35であった。

第１因子『個の発達と友達関係の深まり』は、子どもの個としての表現の発達に関する内容と表現することを介した友達関係の深まりに関する内容が含まれている。古市（2007）[2]は、子どもの身体表現は、子ども自身の発達とその子どもが属している集団の作用という２つの軸を絡ませて解釈する必要性のあることを指摘している。すなわち、子どもの身体表現は個の発達が集団（保育現場では友達）に影響を与え、同時に集団（友達）の作用が個に影響するということである。この子どもの身体表現の特性を踏まえた上で保育者は指導にあたっていることから、第１因子は個に関する内容と友達関係に関する内容が分割せずに１つの因子を構成したものと考えられる。2008年に改訂された幼稚園教育要領の領域「表現」では、表現する過程を大切にすることが強調され、そのために他の幼児の表現に触れられるよう配慮することが求められた[5]。無藤（2009）[6]は、「友達の表現に心を動かされ、幼児同士の表現が影響し合い、自

表３　身体表現に関連する保育実践において重要視している内容
因子分析結果

重み付けなし最小２乗法／プロマックス回転後

項目		F1	F2	F3
第１因子：個の発達と友達関係の深まり				
（α＝.912、平均値＝4.33）				
友達から友達へ表現が広がる		.909	−.075	−.084
自分で創造的な表現を考える		.839	−.046	.030
表現することで友達との関わりが増える		.789	−.063	.010
自分なりの表現ができる		.656	−.143	.215
友達同士で表現を見せ合う		.615	.196	.065
自分でリズムを作り出す		.588	.201	.066
恥ずかしがらずに表現する		.485	.337	−.160
表現することに熱中する		.479	−.014	.372
友達同士が同じ表現をすることを楽しむ		.467	.023	.184
徐々に自分の世界に入っていく		.434	.011	.276
第２因子：決まった型のある表現				
（α＝.824、平均値＝4.36）				
曲に合わせて踊れる		−.077	.740	−.029
少しずつ表現が上手になる		−.086	.680	.191
上手にできたことを子どもが喜ぶ		−.188	.563	.253
集団でそろって動く		.384	.559	−.259
お話の場面を演じる		.367	.504	−.032
以前よりも大きな表現ができるようになる		.185	.411	.236
第３因子：生活を通しての表現				
（α＝.845、平均値＝4.36）				
言葉の代わりに身体で表現し伝える		−.039	−.020	.883
経験したことを身体で再現する		.196	−.077	.723
保育者に表現を見せに来る		−.133	.299	.608
生活の様々な出来事から刺激を受け、表現する		.351	−.005	.444
因子寄与		8.05	6.21	6.00
因子間相関	第１因子	1.00	.667	.618
	第２因子		1.00	.513
	第３因子			1.00

※20 項目全体のα＝.939、平均値＝4.35

分なりの表現が豊かになってい」くと述べている。今後の身体表現の指導において、『個の発達と友達関係の深まり』という視点をもつことは、より重要になると考えられる。

第２因子『決まった型のある表現』は、子どもが曲に合わせて踊ったり、集団でそろって動いたり、お話の場面を演じたりと、ある程度型の決まった表現を繰り返すことで、以前よりも

豊かに表現できるようになり、そこから達成感や一体感を感じることにつながるという内容に解釈される。古市（1995）[7]は、幼児の身体表現遊びの楽しさの１つとして、同調的動作をあげている。それは「皆と同調して動くリズムの共有」であり「皆と一緒に動くこと自体が幼児の心的発達に大きな意味をもつ」と指摘している。曲に合わせて踊ったり、友達と同じ動きをそろってしたりすることで、楽しさや喜びを感じることや、日常保育や生活発表会などでお話の場面を演じたりすることは、保育現場でよくみられることである。この『決まった型のある表現』は身体表現の指導において重要な要素と言える。

第３因子『生活を通しての表現』は、第２因子の内容のようなある程度の型の決まった表現ではなく、さまざまな保育場面で子どもが見せる身振りや、環境や出来事から刺激を受けてする表現と解釈される。生活のなかでの表現を重視することは、教育要領・保育指針で謳われていることである。平田（2009）[8]は、「日常の生活からかけ離れたテーマや活動を提案して結果重視の作品づくりや共同の活動などをしないこと」「特別な生活体験を企画しなくても日常のなかで子どもたちは好奇心＝興味関心を十分に発揮していること」を再確認することの必要性を指摘している。身体表現の指導内容を構成する要素として『生活を通しての表現』は重要な位置を占めると言える。

上記３つの下位尺度得点の平均値をみると、ほぼ同じ得点であった（4.33 ／ 4.36 ／ 4.36）。すなわち、保育者は身体表現に関連する保育実践において、『個の発達と友達関係の深まり』『決まった型のある表現』『生活を通しての表現』を同程度に重要視しているということである。『決まった型のある表現』と『生活を通しての表現』は、一見異質なもののように感じるかもしれない。しかし、この２因子は同程度に重要視されており、また２因子間の相関係数は.513と中程度の関連が認められており、保育者はどちらのほうが重要かという視点では捉えていないことが明らかとなった。

Ｃ．子どもの年齢による比較

身体表現に関連する保育実践において重要視している内容についての回答は、その保育実践が何歳児を想定したものかを合わせて問うている。そこで、子どもの年齢によって３つの下位尺度得点に差があるかどうかを比較した（なお、子どもの年齢の回答人数に偏りがあったため、０～２歳は分析から除外した）。その結果が表４である。

『個の発達と友達関係の深まり』は、３歳よりも４歳のほうが、４歳よりも５歳のほうが有意に得点が高い結果となった。『決まった型のある表現』は、３歳、４歳よりも５歳のほうが有意に得点が高い結果となった。『生活を通しての表現』は、３歳よりも５歳のほうが有意に得点が高い結果となった。全体的に子どもの年齢が高くなるにつれて重要視する程度も高くなり、特に『個の発達と友達関係の深まり』においてその傾向が顕著に示された。幼稚園・保育所（園）で最も年齢の高い５歳児に対して指導に力が入ることは、小学校就学を見据えて「こういうことを経験してほしい」「こういうことができてほしい」といった保育者の子どもに対する指導上の思いが大きくなることなどを推測すると、納得のいく結果と言える。

表４　子どもの年齢による比較（一元配置分散分析、多重比較）
（平均値、括弧内は標準偏差、F 値）

	子どもの年齢			F 値	Tukey HSD 法による多重比較
	3 歳 N＝56	4 歳 N＝40	5 歳 N＝71		
個の発達と友達関係の深まり	3.94(.830)	4.38(.733)	4.74(.695)	17.55***	3 歳＜4 歳 *、3 歳＜5 歳 ***、4 歳＜5 歳 *
決まった型のある表現	4.08(.862)	4.23(.723)	4.71(.739)	10.91***	3 歳＜5 歳 ***、4 歳＜5 歳 **
生活を通しての表現	4.13(.922)	4.33(.890)	4.55(.864)	3.57*	3 歳＜5 歳 *

※回答人数に偏りがあったため、0～2 歳は分析から除外した。　　*p<.05、**p<.01、***p<.001

一方で、年齢ごとに重要視している程度をみると、各年齢の指導の特色が窺える。3 歳は『生活を通しての表現』と『決まった型のある表現』が高く、『個の発達と友達関係の深まり』がそれに続く。4 歳は『個の発達と友達関係の深まり』と『生活を通しての表現』が高く、『決まった型のある表現』がそれに続く。5 歳は『個の発達と友達関係の深まり』と『決まった型のある表現』が高く、『生活を通しての表現』がそれに続く。『個の発達と友達関係の深まり』に注目すると、子どもの年齢が 3 歳から 4 歳にあがるところで各年齢における相対的な重要度が高まり、5 歳でも高い。これは、4 歳以降になると友達との関係がより豊かになることに伴い、個と友達関係を重要視して指導にあたっていると解釈される。一方で、『生活を通しての表現』は子どもの年齢が低いほど各年齢における相対的な重要度が高い。これは、3 歳では生活が特に重要視され、生活を通した何気ない表現、素朴な表現が重視されていると解釈される。

D．保育者の勤続年数による比較

回答者が保育者として勤務してきた年数によって重要視している程度に差があるかどうかを比較した結果、3 つの下位尺度のいずれでも有意な差は認められなかった。これは、本研究の調査対象者の平均勤続年数は18.3年であり、幼稚園教員の全国平均の勤続年数10.3年[9)]と比較するとかなり長く、ベテラン保育者が多くを占めたことが影響しているかもしれない。勤続年数1年前後の初任保育者のデータを増やすことで違った結果が得られるかもしれない。この点については今後の検討が望まれる。

Ⅳ．まとめと今後の課題

本研究は、保育現場における身体表現の指導の現状を明らかにするために、保育者が指導する上で重要視している内容について検討を行った。その結果、重要視している内容は、『個の発達と友達関係の深まり』『決まった型のある表現』『生活を通しての表現』の 3 つの因子で構成されていることが明らかとなった。この 3 つの因子ごとに、子どもの年齢によって重要視している程度に差があるかどうかを検討したところ、5 歳児ほど指導の重要度が増すことが示さ

れた。一方で、子どもの年齢によって重要視している内容が異なることも示され、3歳では『生活を通しての表現』を、4、5歳では『個の発達と友達関係の深まり』を重要視していた。

以上より、身体表現の指導において、子どもの年齢に合わせた具体的な教材や指導方法の必要性が示唆される。本研究では、身体表現に関連する保育実践において、どのような内容を重要視しているかを明らかにしたが、その重要視している内容を実践するための具体的教材や指導方法は明らかにできていない。5歳児に対して、個の発達と友達関係の深まりを実現するための身体表現の教材はどのようなものか、また、3歳児に対して、生活を通しての表現を実践するための指導方法はどのようなものかを明らかにしなければならない。子どもの身体表現力を育む教材開発や指導方法の確立を今後の課題としたい。

最後に、本研究では、身体表現に関連する保育実践において重要視している内容について、子どもが表現している場面から（子どもを主語にして）項目作成を行った。もちろん、身体表現の指導において子どもの表現に対して保育者がどのようにかかわるか（例えば「子どもの表現を（保育者が）受容する」「表現したがらない子に（保育者が）言葉を掛ける」など）を明らかにすることも重要である。今後の課題としたい。

引用文献

1）文部科学省，2008，『幼稚園教育要領解説』，pp.158-159，フレーベル館

2）厚生労働省，2008，『保育所保育指針解説書』，pp.96-97，フレーベル館

3）文部科学省，2011，「学校教育法」第23条5項

4）古市久子，2007，「身体表現の発達に関する研究の現状と課題」，児童心理学の進歩，46，pp.171-195，金子書房

5）無藤隆・柴崎正行編，2009，『新幼稚園教育要領・新保育所保育指針のすべて』，ミネルヴァ書房

6）無藤隆，2009，「幼稚園教育要領の改訂の経緯と趣旨」，新幼稚園教育要領･新保育所保育指針のすべて，p23，ミネルヴァ書房

7）古市久子，1995，「幼児の身体表現活動における諸側面についての一考察」，大阪教育大学幼稚園教員養成課程紀要エデュケア，16，pp.19-25

8）平田智久，2009，「幼稚園教育要領の改訂のポイント　領域・表現」，新幼稚園教育要領・新保育所保育指針のすべて，p73，ミネルヴァ書房

9）文部科学省，2012，「平成22年度学校教員統計調査」

付記

本研究は、日本保育学会第64回大会で発表したものに加筆・修正を加えたものである。

また、平成22年度科学研究費補助金（基盤研究Ｃ）『幼児の身体表現力を豊かに育てる教育方法の提案』（課題番号：22500554、研究代表者：古市久子）による研究の一部である。